

Chapter 6

Mandelbrot 集合に関する結果 —Theorem B, D の証明

5章では Julia 集合に関する結果を証明した。この章ではこれらの結果を用いて parameter space における局所連結性 (Theorem B) と測度に関する結果 (Theorem D) を証明する。そのために §6.1 では $c \in (\text{PR})_{\mathcal{M}}$ または $(\text{IR})_{\mathcal{M}}$ の場合の Theorem B の証明に必要な Comparison Theorem を予め証明しておく。これは $c = c_0$ に対する dynamical plane の partition から定義される $z = c_0$ の周りの annuli の列と、後に定義する、parameter plane に対する partition から定義される $c = c_0$ の周りの annuli の列について、それらの modulus の比が一様に有界であることを主張する。 $c \in (\text{PR})_{\mathcal{M}}$ または $(\text{IR})_{\mathcal{M}}$ の場合の Theorem B の証明はこの定理からただちに従う。Theorem B のすべての証明は §6.2 で述べる。また §6.3 では Theorem D を証明する。

6.1 Comparison Theorem (z -plane \longleftrightarrow c -plane)

$c_0 \in \mathcal{M}$ で f_{c_0} は (1 回も) くりこみ可能でなく, (APR) を満たす (即ち, すべての周期点は反発的である) とする。そこで f_{c_0} に対応する \mathcal{M} の Yoccoz partition を構成し, c_0 を含む puzzle piece の列 $\{P_n^{\mathcal{M}}(c_0)\}_{n=0}^{\infty}$ を構成する。ただし, 厳密には \mathcal{M} の partition ではなく $c_0 \in W_{\frac{p}{q}}$ となる $\frac{p}{q}$ -wake と呼ばれる, parameter space の部分集合 $W_{\frac{p}{q}}$ をとり, これに対して partition を構成する。

f_{c_0} の α -不動点の combinatorial rotation number を $\frac{p}{q}$ とする。なお以後, z -plane における external ray $\mathcal{R}(\theta, K_c)$ を $\mathcal{R}^c(\theta)$, また parameter space における external ray $\mathcal{R}(\theta, \mathcal{M})$ を $\mathcal{R}^{\mathcal{M}}(\theta)$ と書くことにする。

Lemma 6.1.1 [Mi3, p.3, Theorem 1.1, 1.2]. $\frac{p}{q} \in (0, 1)$ とする。

(1) $\theta_0, \theta_1, \dots, \theta_{q-1} \in \mathbb{R}/\mathbb{Z}$ で

$$2\theta_i \equiv \theta_{i+1} \pmod{1}, \quad (\theta_q = \theta_0)$$

を満たし, \mathbb{R}/\mathbb{Z} 上の $\theta_0, \theta_1, \dots, \theta_{q-1}$ の配置が rotation number $\frac{p}{q}$ を持つものが存在する。

この軌道は一意的であり, $\mathbb{R}/\mathbb{Z} \setminus \{\theta_0, \theta_1, \dots, \theta_{q-1}\}$ は最小の長さの区間をただ1つ持つ. それを (θ_-, θ_+) とする.

(2)

$$W_{\frac{p}{q}} := \left\{ c \in \mathcal{M} \mid \begin{array}{l} \mathcal{R}^c(\theta_-) \text{ と } \mathcal{R}^c(\theta_+) \text{ が途中で break up せず potential } 0 \\ \text{まで存在し, 共通の repelling fixed point } \alpha_c \text{ に land する} \end{array} \right\}$$

とする. $c \in W_{\frac{p}{q}}$ のとき $z = c$ は $\mathcal{R}^c(\theta_-)$ と $\mathcal{R}^c(\theta_+)$ で区切られる sector に含まれる (Figure 6.1 (i)). また

$$\partial W_{\frac{p}{q}} = \mathcal{R}^M(\theta_-) \cup \mathcal{R}^M(\theta_+) \cup \{c_{\frac{p}{q}}\}$$

が成立する (Figure 6.1 (ii)). ただし $c_{\frac{p}{q}}$ は $\mathcal{R}^M(\theta_-)$ と $\mathcal{R}^M(\theta_+)$ の共通の landing point であり, $\mathcal{R}^{c_{\frac{p}{q}}}(\theta_-)$ と $\mathcal{R}^{c_{\frac{p}{q}}}(\theta_+)$ は共通の parabolic fixed point に land する. 更に $\mathcal{R}^{c_{\frac{p}{q}}}(\theta_-)$ と $\mathcal{R}^{c_{\frac{p}{q}}}(\theta_+)$ は $c_{\frac{p}{q}}$ を含む parabolic basin に隣接している (Figure 6.1 (iii)). \square

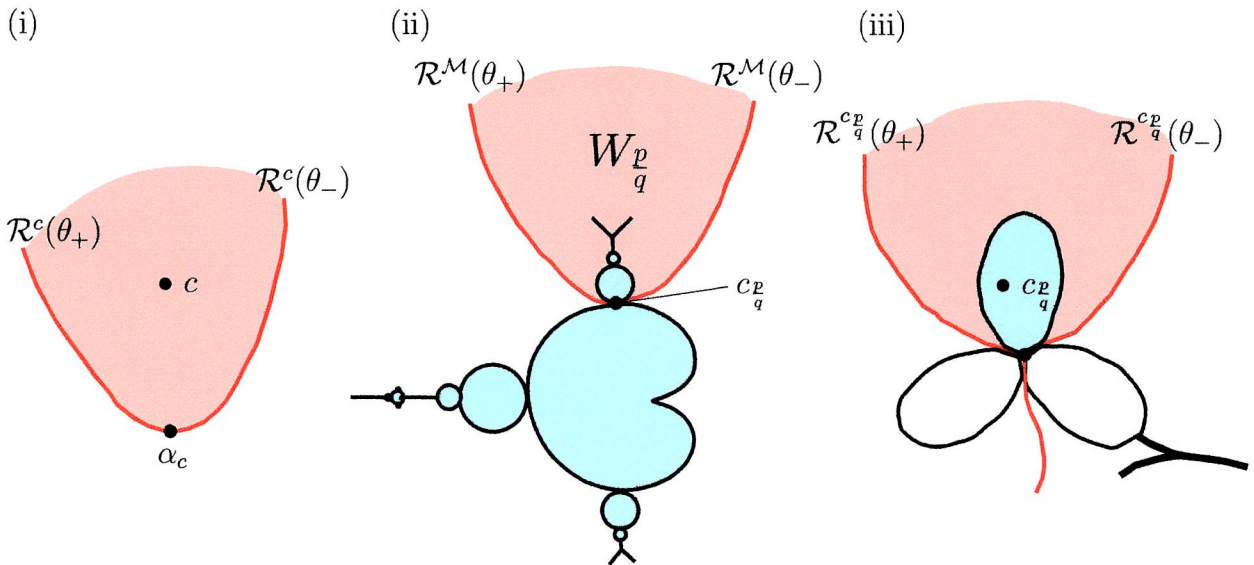


Figure 6.1

Lemma 6.1.1 にある $W_{\frac{p}{q}}$ を $\frac{p}{q}$ -wake という.

Definition 6.1.2. Lemma 6.1.1 にある θ_-, θ_+ をとり, また定数 $\eta_0 > 0$ を1つ定めて $n \geq 0$ に対して

$$\begin{aligned} \Gamma_n^M &:= \left\{ c \in \overline{W_{\frac{p}{q}}} \mid c \in \partial W_{\frac{p}{q}} \text{ or } f_c^n(c) \in \overline{\mathcal{R}^c(\theta_{\pm})} \text{ or } G_c(f_c^n(c)) = \eta_0 \right\} \\ \mathcal{P}_n^M &:= \left\{ W_{\frac{p}{q}} \setminus \Gamma_n^M \text{ の連結成分で } \mathcal{M} \text{ と交わるもの} \right\} \\ \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^* &:= \mathcal{M} \cap W_{\frac{p}{q}} \setminus \left\{ c \in W_{\frac{p}{q}} \mid \exists n, f_c^n(c) = \alpha_c (= \overline{\mathcal{R}^c(\theta_-)} \cap \overline{\mathcal{R}^c(\theta_+)}) \right\} \end{aligned}$$

と定義する. ただし, G_c は §3.1.1 で定義した Green 関数である. $c \in \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^*$ であるとき \mathcal{P}_n^M の元で c を含むものを $P_n^M(c)$ と書き (parameter space における) c を含む **depth n の puzzle piece** という (Figure 6.2).

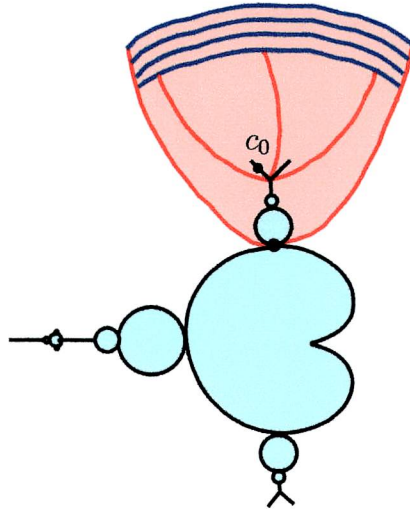


Figure 6.2 Γ_n^M と \mathcal{P}_n^M .

以後, ここで定義した parameter space における puzzle piece $P_n^M(c)$ と区別するために, f_c に関する \mathcal{P}_n に属する元 $P_n(c)$ のことを $P_n^c(c)$ と書くことにする.

Lemma 6.1.3. $c_0 \in \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^*$ とする.

- (1) $P_n^{c_0}(c_0)$ と $P_n^M(c_0)$ は同じ external angle と potential を持つ external rays と equi-potential curve (の一部分) で構成される. 更にそれらが現れる順番も一致する.
- (2) $\overline{P_n^M(c_0)}$ まで $P_n^c(c)$ は拡張される. 即ち, $c \in \overline{P_n^M(c_0)}$ に対しても $P_n^c(c)$ が定義される.
- (3) c が $\partial P_n^M(c_0)$ を 1 周するとき c は $\partial P_n^c(c)$ を “1 周” する. 詳しくは $c \in P_n^M(c_0)$ に対して同相写像

$$\partial_c : \partial P_n^M(c_0) \xrightarrow{\cong} \partial P_n^c(c)$$

が存在し, (1) と同様のことが成立する. $\overline{P_n^M(c_0)} \subset W_{\frac{p}{q}}$ ならこの ∂_c は $c \in \partial P_n^M(c_0)$ に対して拡張され

$$\partial_c(c) = c \in \partial P_n^c(c)$$

が成立し, 更に c が $\partial P_n^M(c_0)$ を 1 周するとき $\partial_c(c) = c \in \partial P_n^c(c)$ は上記の external angle と potential によるパラメータづけでみて $\partial P_n^c(c)$ を 1 周する (Figure 6.3 参照).

(Outline of the Proof) : (1) は n に関する帰納法によって証明される. まず $n = 0$ のときは Lemma 6.1.1 より主張が成り立つ. また例えば $\frac{p}{q} = \frac{1}{3}$ のときは $n = 1, 2$ に対しては equi-potential の level が下がるだけで puzzle piece $P_n^M(c_0)$ の境界の combinatorics は変化しないことに注意せよ. この場合は $n = 3$ で初めて変化が起こる. Figure 6.2 を参照せよ. また 4 章の Figure 4.2-1, 4.2-2 も参照せよ. \square

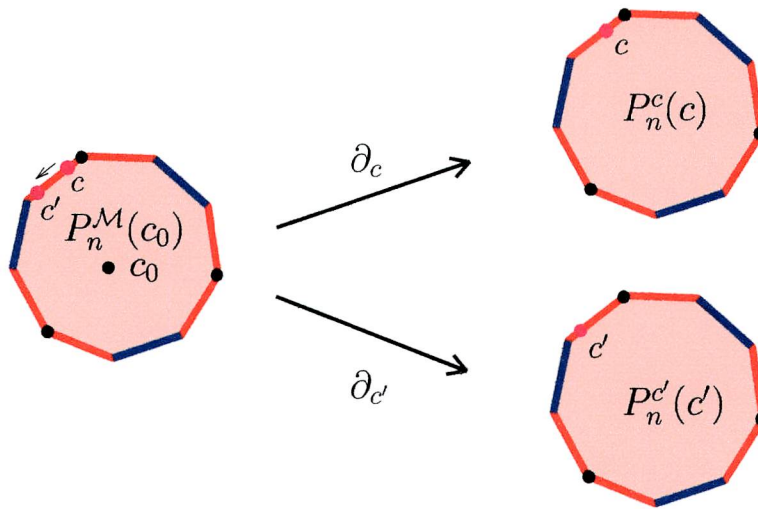


Figure 6.3

Lemma 6.1.4. $c_0 \in \mathcal{M}_q^*$ のとき $\overline{P_n^M(c_0)} \cap \mathcal{M}$ は連結.

(Proof) : Lemma 4.1.1 と全く同様の議論により, もし $\overline{P_n^M(c_0)} \cap \mathcal{M}$ が連結でないとすると, \mathcal{M} が連結でないことになり Corollary 3.2.2 に矛盾することがわかる. \square

さて $c_0 \in \mathcal{M}_q^*$ とし, f_{c_0} はくりこみ可能ではないとすると, Separation Lemma (Lemma 4.1.2) より, ある $N \in \mathbb{N}$ に対して

$$\overline{P_{N+1}^{c_0}(0)} \subset P_N^{c_0}(0)$$

が成り立つ. f の作用を考えればこれは

$$\overline{P_N^{c_0}(c_0)} \subset P_{N-1}^{c_0}(c_0) \tag{6.1}$$

と同値である (4章 Figure 4.6 参照). (6.1) を用いると parameter space における Separation Lemma が次のように示される (Douady's Principle!) :

Lemma 6.1.5 (Separation Lemma in Parameter Space).

- (1) $\overline{P_N^M(c_0)} \subset P_{N-1}^M(c_0) \subset W_q$ が成立する.
- (2) $c \in \overline{P_N^M(c_0)}$ ならば $\overline{P_N^c(c)} \subset P_{N-1}^c(c)$ が成立する.

(Proof) : (1) Lemma 6.1.3 より external ray と potential による対応

$$\partial P_N^{c_0}(c_0) \longleftrightarrow \partial P_N^M(c_0), \quad \partial P_{N-1}^{c_0}(c_0) \longleftrightarrow \partial P_{N-1}^M(c_0)$$

がある. (6.1) より $\partial P_N^{c_0}(c_0)$ と $\partial P_{N-1}^{c_0}(c_0)$ は交わらない. よって $\partial P_N^M(c_0)$ と $\partial P_{N-1}^M(c_0)$ も交わらない. 従って $\overline{P_N^M(c_0)} \subset P_{N-1}^M(c_0)$ が成り立つ.

(2) 同じく Lemma 6.1.3 より external ray と potential による対応

$$\partial P_N^{c_0}(c_0) \longleftrightarrow \partial P_N^c(c), \quad \partial P_{N-1}^{c_0}(c_0) \longleftrightarrow \partial P_{N-1}^c(c), \quad (c \in \overline{P_N^M(c_0)})$$

があるので, (1) と同様の理由で $\overline{P_N^c(c)} \subset P_{N-1}^c(c)$ が成立する. \square

さて

$$A_n^M(c_0) := P_n^M(c_0) \setminus \overline{P_{n+1}^M(c_0)}$$

と定義し, 今まで $A_n(x)$ と書いてきた f_c の相空間内の集合を $A_n^c(x)$ と書くことにする. Lemma 6.1.5 より $A_N^{c_0}(0)$ が non-degenerate annulus ならば $A_{N-1}^M(c_0)$ も non-degenerate annulus になる. また一般に $\mu(n+1) > 0$ ならば $A_{n+1}^{c_0}(0)$ が non-degenerate annulus であり, 従って

$$A_n^{c_0}(c_0) = f_{c_0}(A_{n+1}^{c_0}(0))$$

も non-degenerate annulus になるので, Lemma 6.1.5 (1) の証明にあるのと同様の理由により $A_n^M(c_0)$ も non-degenerate annulus になる. これらの annuli の modulus の間には次の Comparison Theorem が成り立つ:

Theorem 6.1.6 (Comparison Theorem (Yoccoz)). $c_0 \in \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^*$ で f_{c_0} はくりこみ可能ではなく, (APR) であるとする. またこの c_0 に対して Lemma 6.1.5 にある N (separation level) をとる. このとき定数 $K = K(\frac{p}{q}, N) > 0$ が存在し, $\mu(n+1) > 0$ なる任意の n に対して次の評価が成立する:

$$\frac{1}{K} \leq \frac{\text{mod } A_n^M(c_0)}{\text{mod } A_n^{c_0}(c_0)} \leq K.$$

この定理の証明の前に, 必要な概念の定義とそれらのいくつかの性質を挙げておく.

Definition 6.1.7. X を \mathbb{C} の部分集合とするとき $i: X \times \mathbb{D} \rightarrow \mathbb{C}$ が X の holomorphic motion であるとは $i(z, \lambda) =: i_\lambda(z)$ としたとき, 次を満たすことをいう:

- $i_0 = i(\cdot, 0) = \text{恒等写像}$,
- 任意の $\lambda \in \mathbb{D}$ に対し $i_\lambda = i(\cdot, \lambda)$ は単射,
- 任意の $z \in X$ に対し $i_\lambda(z)$ は λ について解析的.

また, $\Omega, \Omega' \subset \mathbb{C}$ を開集合としたとき $f: \Omega \rightarrow \Omega'$ が **K -quasi-regular** であるとは

$$f = f_2 \circ f_1, \quad f_1: K\text{-quasi conformal}, \quad f_2: \text{analytic}$$

と表せることをいう.

holomorphic motion については次が成り立つ :

Theorem 6.1.8 (Optimal λ -Lemma (Ślodkowski [Śl, p.348, Theorem 1.3])).

$i : X \times \mathbb{D} \rightarrow \mathbb{C}$ を $X \subset \mathbb{C}$ の holomorphic motion とする. このとき \mathbb{C} の holomorphic motion $\tilde{i} : \mathbb{C} \times \mathbb{D} \rightarrow \mathbb{C}$ で $\tilde{i}_\lambda : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ は quasi-conformal で, $\tilde{i}|_{X \times \mathbb{D}} = i$ となるものが存在する. \square

また, 次の Lemma は Comparison Theorem の証明の 1 つの鍵となる :

Lemma 6.1.9 ([DH2, p.327, Lemma]). $h : \mathbb{C} \times \Lambda \rightarrow \mathbb{C}$ を holomorphic motion, $\Lambda \simeq \mathbb{D}$ (この対応により $\Lambda \ni \lambda_0 \longleftrightarrow 0 \in \mathbb{D}$), また $v : \Lambda \rightarrow \mathbb{C}$ を holomorphic map とする. $c \in \Lambda$ に対して $h_c(z) := h(z, c)$ とし, $g(c) := h_c^{-1}(v(c))$ とおく. 更に $\Lambda_1 \subset \Lambda$ を開集合で $\overline{\Lambda_1} \subset \Lambda$ を満たし $\overline{\Lambda_1}$ がコンパクトになるものとする. このとき g は Λ_1 上 K -quasi-regular になり, しかも定数 K は $\sup_{z \in \partial \Lambda_1} \text{distance}(\lambda_0, z)$ (ただし “distance” は Λ 内の Poincaré distance) のみに依存する. 更に $\sup_{z \in \partial \Lambda_1} \text{distance}(\lambda_0, z) \rightarrow 0$ のとき (即ち, Λ_1 が 1 点 $\lambda_0 \in \Lambda$ に縮むとき) $K \rightarrow 1$ となる. \square

(Proof of Comparison Theorem) : $\Lambda := P_N^M(c_0)$ とし, holomorphic motion

$$i : (\partial P_{N+1}^{\text{co}}(0) \cup \partial P_N^{\text{co}}(0)) \times \Lambda \rightarrow \mathbb{C}$$

を次で定義する (注 : $\partial P_{N+1}^{\text{co}}(0) \cup \partial P_N^{\text{co}}(0) = \partial A_N^{\text{co}}(0)$ である) :

1. $i(*, c_0) = \text{id}$,
2. $i_c := i(*, c) : \partial P_{N+1}^{\text{co}}(0) \cup \partial P_N^{\text{co}}(0) \rightarrow \partial P_{N+1}^c(0) \cup \partial P_N^c(0)$ は external angle と potential による canonical な対応 (Lemma 6.1.3).

定義より任意の c に対して i_c は単射になり, また任意の z に対して $i_c(z)$ は c について解析的であるから, 確かに i は holomorphic motion になる. すると Optimal λ -Lemma より holomorphic motion

$$h : \mathbb{C} \times \Lambda \rightarrow \mathbb{C}$$

で $h|\partial A_N^{\text{co}}(0) \times \Lambda = i$ を満たすものが存在する. $h_c := h(*, c)$ とおく. $\mu(n+1) > 0$ となる n を考えると $f_{c_0}^{n-N}$ によって $A_n^{\text{co}}(c_0)$ は $A_N^{\text{co}}(0)$ に写され

$$f_{c_0}^{n-N} : A_n^{\text{co}}(c_0) \rightarrow A_N^{\text{co}}(0)$$

はある $k \in \mathbb{N}$ に対して 2^k 次の covering になる. すると Lemma 6.1.3 より $c \in \overline{P_n^M(c_0)}$ のとき

$$f_c^{n-N} : A_n^c(c_0) \rightarrow A_N^c(0)$$

も 2^k 次の covering になる. また先に説明したように $\overline{P_{n+1}^M(c_0)} \subset P_n^M(c_0)$ であり Lemma 6.1.3 より c が $\partial P_n^M(c_0)$ を 1 周するとき c は $\partial P_n^c(c)$ を 1 周する. 従って c が $\partial P_n^M(c_0)$ を 1 周するとき $f_c^{n-N}(c)$ は $\partial P_N^c(0)$ をちょうど 2^k 周する. 同様に c が $\partial P_{n+1}^M(c_0)$ を 1 周するとき $f_c^{n-N}(c)$ は $\partial P_{N+1}^c(0)$ をちょうど 2^k 周する. そこで $g : \overline{A_n^M(c_0)} \rightarrow \mathbb{C}$ を

$$g(c) = h_c^{-1} \circ f_c^{n-N}(c)$$

で定義すると次が成り立つ :

Lemma 6.1.10. g は $\overline{A_n^M(c_0)}$ から $\overline{A_N^{co}(0)}$ への 2^k 次の covering であり, 内点においては quasi-regular である.

(Proof) : g が quasi-regular であることは Lemma 6.1.9 からただちに従う. また先程述べたとおり g は $\partial A_n^M(c_0)$ 上では 2^k 次の covering である. この2つのことから g は $\overline{A_n^M(c_0)}$ から $\overline{A_N^{co}(0)}$ への 2^k 次の covering にならざるを得ない (つまり critical point を持ち得ない). \square

この Lemma より g は quasi-regular であるので次のように分解できる :

$$\begin{aligned} g &: A_n^M(c_0) \xrightarrow{f_1} f_1(A_n^M(c_0)) \xrightarrow{f_2} A_N^M(0), \\ f_1 &: K_n\text{-quasi conformal}, \quad f_2 : \text{analytic, } 2^k\text{ 次の covering} \end{aligned}$$

このことから

$$\frac{1}{K_n} \cdot \frac{1}{2^k} \leq \frac{\text{mod } A_n^M(c_0)}{\text{mod } A_N^{co}(0)} \leq K_n \cdot \frac{1}{2^k}$$

であることがわかる. これと

$$\text{mod } A_n^{co}(c_0) = \frac{1}{2^k} \cdot \text{mod } A_N^{co}(0)$$

であることから

$$\frac{1}{K_n} \leq \frac{\text{mod } A_n^M(c_0)}{\text{mod } A_n^{co}(c_0)} \leq K_n$$

が従う. ここで定数 K_n は, 一般に $P_n^M(c_0) \supseteq P_{n+1}^M(c_0)$ であることを考えると Lemma 6.1.9 より n によらない値でとることができる. つまり $K = K(\frac{p}{q}, N)$ で任意の n に対して $K_n \leq K$ を満たすものがとれる. よって

$$\frac{1}{K} \leq \frac{\text{mod } A_n^M(c_0)}{\text{mod } A_n^{co}(c_0)} \leq K$$

が成り立つ. \square

6.2 Theorem B の証明

$c_0 \in \mathcal{M}$ とし f_{c_0} は (APR) を満たし, 更にくりこみ可能でないとする.

(Step I) $c_0 \in (\text{PR})_{\mathcal{M}}$ または $(\text{IR})_{\mathcal{M}}$ の場合 :

$\mu(n+1) > 0$ であるとき $f : A_{n+1}^{co}(0) \rightarrow A_n^{co}(c_0)$ は 2 対 1 の covering になるので

$$\text{mod } A_n^{co}(c_0) = 2 \cdot \text{mod } A_{n+1}^{co}(0) > 0$$

が成り立つ. よって Combinatorial Divergence Theorem より

$$\sum_{\mu(n+1) > 0} \text{mod } A_n^{co}(c_0) = \infty$$

であることがわかる. 従って Comparison Theorem より

$$\sum_{\mu(n+1)>0} \text{mod } A_n^{\mathcal{M}}(c_0) \geq \frac{1}{K} \sum_{\mu(n+1)>0} \text{mod } A_n^{\text{co}}(c_0) = \infty$$

即ち

$$\sum_{\mu(n+1)>0} \text{mod } A_n^{\mathcal{M}}(c_0) = \infty$$

が従う. よって Proposition 2.3.11 より

$$\text{diam } P_n^{\mathcal{M}}(c_0) \rightarrow 0, \quad (n \rightarrow \infty)$$

となる. これは \mathcal{M} が c_0 で局所連結であることを示す.

(Step II) $c_0 \in (\text{NR})_{\mathcal{M}}$ の場合 :

証明の outline だけを以下で述べる.

$$K_m^{\text{co}} := \{x \in K_{c_0}^* \mid f_{c_0}^n(x) \notin P_m^{\text{co}}(0), n = 0, 1, \dots\}$$

とすると $c_0 \in (\text{NR})_{\mathcal{M}}$ より, 適当な $m \in \mathbb{N}$ に対して $c_0 \in K_m^{\text{co}}$ となる. そこで

$$Q_k^{\text{co}} := P_m^{\text{co}}(f^k(c_0)) \in \mathcal{P}_m^{\text{co}} \setminus \{P_m^{\text{co}}(0)\}$$

とすると $n \geq m$ のとき $P_n^{\text{co}}(c_0)$ は $f^{-(n-m)}(Q_{n-m}^{\text{co}})$ の連結成分である. 更に詳しく

$$P_n^{\text{co}}(c_0) = (f_{c_0}|_{Q_0^{\text{co}}})^{-1} \circ (f_{c_0}|_{Q_1^{\text{co}}})^{-1} \circ \dots \circ (f_{c_0}|_{Q_{n-m-1}^{\text{co}}})^{-1}(Q_{n-m}^{\text{co}}) \quad (6.2)$$

と表せる (注: ただし $f_{c_0}^{-1}$ の branch は各段階で適当なものをとる). ここで $c \in P_m^{\mathcal{M}}(c_0)$ ならば $P_m^{\mathcal{M}}(c_0)$ の定義から Γ_m^{co} と Γ_m^c は combinatorial に同型であることがわかる. そこで $c \in P_m^{\mathcal{M}}(c_0)$ に対して

$$R_n^c := (f_c|_{Q_0^c})^{-1} \circ (f_c|_{Q_1^c})^{-1} \circ \dots \circ (f_c|_{Q_{n-m-1}^c})^{-1}(Q_{n-m}^c)$$

とすると (注: ただし f_c^{-1} の branch は (6.2) にあるのと同様にとる) $R_n^c \in \mathcal{P}_n^c$ である. また

$$R_m^c \supset R_{m+1}^c \supset \dots$$

であり, Theorem A の証明の (Step I) で述べた双曲性を使った議論から

$$\text{diam } R_n^c \rightarrow 0, \quad (n \rightarrow \infty)$$

が示せる. 次に

$$R_n^{\mathcal{M}} := \{c \in P_m^{\mathcal{M}}(c_0) \mid c \in R_n^c\}$$

とおくと (注: 一般に $c \in R_n^c$ であるかどうかはわからない)

$$R_m^{\mathcal{M}} \supset R_{m+1}^{\mathcal{M}} \supset \dots, \quad c_0 \in \bigcap_{n \geq m} R_n^{\mathcal{M}}$$

が成り立つ. 実は

$$R_n^{\mathcal{M}} = P_n^{\mathcal{M}}(c_0)$$

でありしかも

$$\text{diam } R_n^{\mathcal{M}} \rightarrow 0, \quad (n \rightarrow \infty)$$

であることが示せる. 従って \mathcal{M} は c_0 で局所連結である.

以上で Theorem B は証明された. □

$c_0 \in (\text{PR})_{\mathcal{M}}$ または $(\text{IR})_{\mathcal{M}}$ の場合は Comparison Theorem によって証明したわけであるが, この場合に z -plane における c_0 を囲む annulus $A_n^{c_0}(c_0)$, c -plane における c_0 を囲む annulus $A_n^{\mathcal{M}}(c_0)$ それぞれの modulus の比の極限については次のことが成り立つ:

Corollary 6.2.1 . $\mu(n_k + 1) > 0$, $n_k \nearrow \infty$ なる列 $\{n_k\}_{k=1}^{\infty}$ に対して

$$\frac{\text{mod } A_{n_k}^{\mathcal{M}}(c_0)}{\text{mod } A_{n_k}^{c_0}(c_0)} \rightarrow 1 \quad (k \rightarrow \infty)$$

が成立する.

(Proof) : Comparison Theorem の証明より

$$\frac{1}{K_n} \leq \frac{\text{mod } A_n^{\mathcal{M}}(c_0)}{\text{mod } A_n^{c_0}(c_0)} \leq K_n$$

であり, 定数 K_n は Lemma 6.1.9 より $\sup_{z \in \partial P_n^{\mathcal{M}}(c_0)} \text{distance}(c_0, z)$ (ただし “distance” は $P_n^{\mathcal{M}}(c_0)$ 内の Poincaré distance) によるものである. そして Theorem B の証明より

$$\text{diam } P_n^{\mathcal{M}}(c_0) \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$$

即ち, $P_n^{\mathcal{M}}(c_0)$ は 1 点 c_0 に縮むので再び Lemma 6.1.9 より

$$K_n \rightarrow 1 \quad (n \rightarrow \infty)$$

が成り立つ. よって

$$\frac{\text{mod } A_{n_k}^{\mathcal{M}}(c_0)}{\text{mod } A_{n_k}^{c_0}(c_0)} \rightarrow 1 \quad (k \rightarrow \infty)$$

が成立する. □

6.3 Theorem D の証明

f_c はくりこみ可能ではなく, また f_c のすべての周期点は反発的であるとする. 以下ではパラメーター c に対する τ -関数とこれに付随する Σ , それに weight function μ をそれぞれ $\tau^{(c)}$, Σ^c , μ^c と書くことにする. α -不動点の combinatorial rotation number $\frac{p}{q} \in (0, 1)$ と separation level N をそれぞれ 1 つとり固定する. f_c が 4 つの条件

1. f_c はくりこみ可能ではない,
2. f_c のすべての周期点は反発的である,
3. f_c の α -不動点の combinatorial rotation number は $\frac{p}{q}$,
4. f_c の separation level は N ,

を満たすことをまとめて (*) の記号で表すことにする. そこで $\mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^*$ を次の 3 つの集合に分類する:

$$\begin{aligned}
 Y_k &= Y_{\frac{p}{q}, N, k} \quad (k = 1, 2, \dots) \\
 &:= \left\{ c \in \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^* \mid (*), \sup_{n \in \mathbb{N}} \tau^{(c)}(n) = \infty, \sup \tau^{(c)^{-1}}(N) = k, \liminf_{n \rightarrow \infty} \tau^{(c)}(n) > N \right\} \\
 Y_\infty &= Y_{\frac{p}{q}, N, \infty} \\
 &:= \left\{ c \in \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^* \mid (*), \limsup_{n \rightarrow \infty} \tau^{(c)}(n) > N, \liminf_{n \rightarrow \infty} \tau^{(c)}(n) \leq N \right\} \\
 Z_m &= Z_{\frac{p}{q}, N, m} \quad (m = 1, 2, \dots) \\
 &:= \left\{ c \in \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^* \mid (*), \limsup_{n \rightarrow \infty} \tau^{(c)}(n) < m \right\}
 \end{aligned}$$

この分類は Theorem C の証明のときに用いたやり方に従っている. ただしそのときに使ったのと同じような記号を一部使っているが, 意味しているものは全く違うので注意していただきたい. またすべての場合について「 f_c はくりこみ可能ではない」としているので, 常に $\#\Sigma^c = \infty$ である (Proposition 4.2.2 (2) 参照). 更に

1. $c \in (\text{PR})_{\mathcal{M}}$ ならば, ある $k \in \mathbb{N}$ に対して $c \in Y_k$,
2. $c \in (\text{IR})_{\mathcal{M}}$ ならば, ある $k \in \mathbb{N}$ に対して $c \in Y_k$, または $c \in Y_\infty$,
3. $c \in (\text{NR})_{\mathcal{M}}$ ならば, ある $k \in \mathbb{N}$ に対して $c \in Z_k$,

となる. よって Theorem D を証明するには Y_k, Y_∞, Z_k の各々が測度 0 であることを示せば十分である. そのための方法は Theorem C の証明のときと同様で Y_k は Modulus-Area inequality と Combinatorial Divergence Theorem で, Y_∞ は Koebe's Distortion Theorem を使った議論で, Z_k は双曲性を使った議論で, それぞれ証明する.

(Step I) Y_k について:

$$\mathcal{A}_k^M = \mathcal{A}_{\frac{p}{q}, N, k}^M := \{A_n^M(c) \mid c \in Y_k, n > k, \mu^c(n+1) > 0\}$$

とすると Theorem C の証明の (Step II) と同様に次が成り立つ:

Lemma 6.3.1. \mathcal{A}_k^M の相異なる annuli は互いに disjoint である.

(Proof) : $c_1, c_2 \in Y_k$ で $k < n < m$ として $A_n^M(c_1)$ と $A_m^M(c_2)$ が disjoint でなかったとする (Figure 6.4 参照).

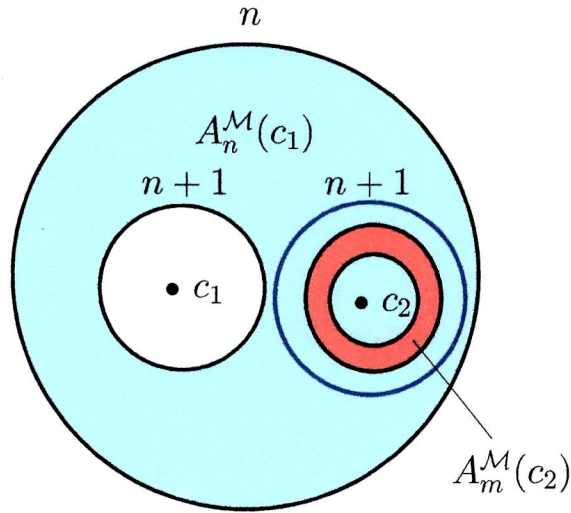


Figure 6.4 c -plane における pieces の関係.

このとき $A_m^M(c_2)$ を含む $(n+1)$ -piece を考えると Figure 6.4 のようになっており, depth n と $n+1$ のときの pieces の境界の combinatorial な対応を考えると (Lemma 6.1.3), $c = c_1$ の z -plane では Figure 6.5 のようなことがおこっていることがわかる :

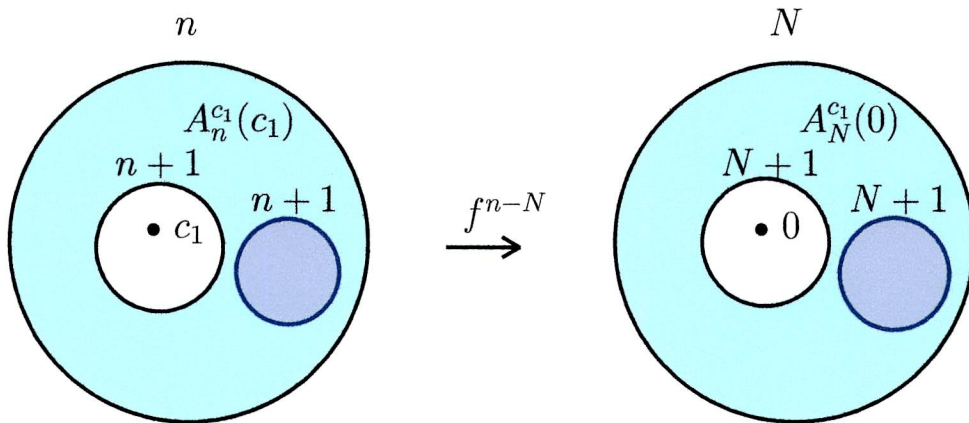


Figure 6.5 $c = c_1$ のときの z -plane における pieces の関係.

さて, $P_n^M(c_1)$ の定義より c が $P_n^M(c_1)$ 内を動くとき $P_n^c(c)$ 中の $(n+1)$ -pieces の combinatorics は変化しないことがわかる. また一方, $P_n^{c_1}(c_1)$ 中の $(n+1)$ -pieces と $P_n^M(c_1)$ 中の $(n+1)$ -pieces の間には 1 対 1 対応がつく. この 2 つの事実から $c = c_2$ に対しても $\partial P_{n+1}^M(c_2)$ と $\partial P_{n+1}^{c_2}(c_2)$ の間に 1 対 1 対応がつくことがわかる. 従って

$$f_{c_2}^{n-N} : P_{n+1}^{c_2}(c_2) \rightarrow P_{N+1}^{c_2}(f_{c_2}^{n-N}(c_2))$$

であり, 更に任意の $0 \leq j \leq n - N$ に対して $0 \notin f_{c_2}^j(P_{n+1}^{c_2}(c_2))$ である. これは

$$\tau^{(c_2)}(n+2) \leq N$$

であることを示しており, 一方 $\sup_{n \in \mathbb{N}} \tau^{(c_2)}(n) = \infty$ であるから中間値の定理より, ある $k' \geq n+2$ に対して $\tau^{(c_2)}(k') = N$ となる. これは $\max \tau^{(c_2)^{-1}}(N) = k < n$ であること, 即ち, $c_2 \in Y_k$ であることに反する. \square

さて, $c \in Y_k$ だから Combinatorial Divergence Theorem より

$$\sum_{\mu^c(n+1) > 0} \mu^c(n+1) = \infty$$

であるから Proposition 4.2.16 と Comparison Theorem を考慮すると

$$Y_k \subset \left\{ z \in \mathbb{C} \mid \sum_{z \in D_A, A \in \mathcal{A}_k^M} \text{mod } A = \infty \right\}$$

が成り立つ. すると Lemma 2.3.14 より $|Y_k| = 0$ がわかる.

(Step II) Y_∞ について:

任意の $c_0 \in Y_\infty$ が Y_∞ の density point でないことを以下で示す.

$c_0 \in Y_\infty$ より自然数の列 $n_1 < n_2 < \dots < n_j < \dots$ で

$$\tau^{(c_0)}(n_j) = N, \quad n_j \notin \Sigma^{c_0} \quad (\text{即ち, } \tau^{(c_0)}(n_j + 1) = N + 1)$$

となるものが存在する. すると

$$f_{c_0}^{n_j - N - 1} : A_{n_j - 1}^{c_0}(c_0) \rightarrow A_N^{c_0}(0) \quad (6.3)$$

は conformal である. c が $\partial P_{n_j - 1}^M(c_0)$ を 1 周するとき Lemma 6.1.3 より c は $\partial P_{n_j - 1}^c(c)$ を 1 周し, (6.3) より $f_c^{n_j - N - 1}(c)$ は $\partial P_N^c(0)$ を 1 周する. ここで \mathcal{M} の c_0 における局所連結性の証明から

$$\text{diam } P_{n_j - 1}^M(c_0) \rightarrow 0, \quad (j \rightarrow \infty)$$

であることがわかっているのです. j が十分大なら c が $P_{n_j - 1}^M(c_0)$ を動くとき $\partial P_N^c(0)$, $\partial P_{N+1}^c(0)$ は相空間である複素平面上をほとんど動かない. 従って c が $P_{n_j - 1}^M(c_0)$ を 1 周するとき $f_c^{n_j - N - 1}(c)$ は $\overline{P_{N+1}^{c_0}(c_0)}$ の外側を 1 周することになる. よって関数 $f_c^{n_j - N - 1}(c)$ の逆関数

$$g_i : P_{N+1}^{c_0}(0) \rightarrow P_{n_j - 1}^M(c_0)$$

が定義できる (注: 偏角の原理による). そこで

$$B \subset P_{N+1}^{c_0}(0) \setminus K_{c_0}$$

を 1 つの閉円板とすると, c が c_0 に十分近ければ

$$B \subset \mathbb{C} \setminus K_c \quad (6.4)$$

となる. よって j を十分大として $c \in P_{n_j - 1}^M(c_0)$ のとき (6.4) が成立しているとしてよい. ここで $c \in g_i(B)$ とすると

$$f_c^{n_j - N - 1}(c) \in B \subset \mathbb{C} \setminus K_c$$

であるから $c \notin M$, 即ち, $c \notin Y_\infty$ である. よって Koebe's Distortion Theorem と Proposition 2.2.6 より c_0 は Y_∞ の density point ではあり得ない. 従って Lebesgue's Density Theorem より $|Y_\infty| = 0$ である.

(Step III) Z_m について:

証明の outline を以下で示す.

$$K_m^c := \{x \in K_c^* \mid f_c^n(x) \notin P_m^c(0), n = 0, 1, \dots\}$$

とすると (注: K_m^c の “c” は補集合を表す記号ではないことに注意), Proposition 5.1.4 より $c \in Z_m$ なら $c \in K_m^c$ である. さて, $c_0 \in Z_m, c \in \overline{P_m^M(c_0)}$ のとき itinerary で対応をつけることにより

$$K_m^{c_0} \xrightarrow{\cong} K_m^c$$

なる同型写像がつかれる. これを用いると holomorphic motion

$$i : K_m^{c_0} \times P_m^M(c_0) \rightarrow \mathbb{C}$$

であって

$$i_c(z) := i(z, c) : K_m^{c_0} \rightarrow K_m^c$$

となるものが構成できる. すると任意の $z \in K_m^{c_0}$ に対して写像

$$z(c) := i(z, c) : P_m^M(c_0) \rightarrow \mathbb{C}$$

は恒等写像 $z(c) \equiv c$ とはならないことがわかる. Optimal λ -Lemma (Theorem 6.1.8) より i は holomorphic motion

$$\tilde{i} : \mathbb{C} \times P_m^M(c_0) \rightarrow \mathbb{C}$$

に拡張される. そこで

$$g(c) := \tilde{i}_c^{-1}(c)$$

とおくと g は $g(c_0) = c_0$ を満たし, また Lemma 6.1.9 より quasi-regular である. U を c_0 の任意の近傍とすると構成の方法から

$$Z_m \cap U = g^{-1}(K_m^{c_0}) \cap U$$

であることがわかる. さて $K_m^{c_0}$ は Theorem C の証明の (Step IV) より測度 0 であった. quasi-regular map は「測度 0 である」という性質を保存するので, これから $|Z_m \cap U| = 0$ であることがわかる. $c_0 \in Z_m$ は任意であったから $|Z_m| = 0$ が示されたことになる.

以上で Theorem D は証明された. □

Remark 6.3.2. (1) $f(z) = z^l + c$ の形の多項式で l が十分大のとき, ある $c \in \mathbb{R}$ に対して f はくりこみ可能ではなく, すべての周期点は反発的であり, しかも $|J_f| > 0$ となる, という主張もある ([NvS, p.2, Main Theorem]).

(2) Remark 1.1.10 でも述べたとおり, 無理的中立周期点をもつ p_c で, J_c が局所連結でないような例がある. そこで

回転数 (Diophantine condition) で局所連結性を特徴づけられるか?

という問題が考えられるが, これについては [Pe2] を参照せよ.

(3) 無限回くりこみ可能な p_c で, J_c が局所連結でないような例がある ([Mi2, §3]). そこで

くりこみの周期のパターンで局所連結性を特徴づけられるか?

という問題が考えられる ([Ly3] も参照せよ).

Appendix A

Branner-Hubbard の 3 次多項式に関する理論

以下では f を 3 次多項式とし, ω_1, ω_2 を 2 つの critical points とする. このとき可能性として次の 3 通りが考えられる:

1. $\omega_1, \omega_2 \in K_f$,
2. $\omega_1, \omega_2 \in \mathbb{C} \setminus K_f$,
3. ω_1, ω_2 のどちらか一方が K_f に属し, もう一方が $\mathbb{C} \setminus K_f$ に属する.

最初の 2 つの場合は Theorem 1.1.1 よりそれぞれ K_f は連結, K_f は Cantor 集合となる. そこで以下では残りの第 3 の場合を考える. これに関しては次が成り立つ:

Theorem A.0.1 (Branner-Hubbard [BH, p.273, Theorems 5.3; p.278, Theorem 5.9]). f, ω_1, ω_2 を上のおりとし, $\omega_1 \in K_f, \omega_2 \notin K_f$ であるとする. ここで $K(\omega_1)$ を K_f の ω_1 を含む連結成分とする. このとき次のどちらかが成立する:

(1) $K(\omega_1)$ が f に関して周期的 (即ち, ある $p \in \mathbb{N}$ に対して $f^p(K(\omega_1)) = K(\omega_1)$) ならば, $U \supset K(\omega_1)$ なる開集合 U が存在して $f^p: U \rightarrow f^p(U)$ が次数 2 の polynomial-like mapping となる. 即ち, $U, f^p(U)$ は単連結で $f|_U$ が 2 : 1 の covering であり, $f^p(U) \supset \bar{U}$ が成立する. 従ってこのときはある $c \in \mathcal{M}$ に対して $K(\omega_1) \simeq K_c$ となる.

(2) $K(\omega_1)$ が f に関して周期的でないならば, K_f は Cantor 集合であり, 更に $|K_f| = 0$ である.

Remark A.0.2. 上記定理 (2) の $|K_f| = 0$ の主張は McMullen による ([BH, p.235]).

この結果は元の論文では Tableau を用いて証明されているし, また [Mi2, §2] ではこの結果の一般化として d 次多項式で 1 つの critical point を除いてすべての critical points が $\mathbb{C} \setminus K_f$ に属する場合に同様な結果が得られることが, やはり Tableau を用いて示されている. ここではこの場合に通用する τ -関数を新たに定義し, それに付随した weight function に関する Combinatorial Divergence Theorem を示すことによって証明する. なお, 以下の証明は宍倉による.

最初に第 3 の場合の例を 2 つだけ挙げておく.

Example A.0.3. (1) $f_\lambda(z) := \lambda z^2(z-1)$ とし $\omega_1 := 0$, $\omega_2 := \frac{2}{3}$ とすると, $f_\lambda(\omega_1) = \omega_1$ でありまた λ が十分大のとき $f_\lambda^n(\omega_2) \rightarrow \infty$ となる.

(2) f が実 3 次多項式で Figure A.1 のようなグラフを持つ場合, $f(\omega_1) = \alpha$ で α は反発不動点である. 更に $K(\alpha)$ を α を含む K_f の連結成分とすると $K(\omega_1) \neq K(\alpha)$ で

$$f(K(\omega_1)) = K(\alpha), \quad f(K(\alpha)) = K(\alpha)$$

が成り立つ. また $f_\lambda^n(\omega_2) \rightarrow \infty$ となる (Theorem 1.1.3 参照).

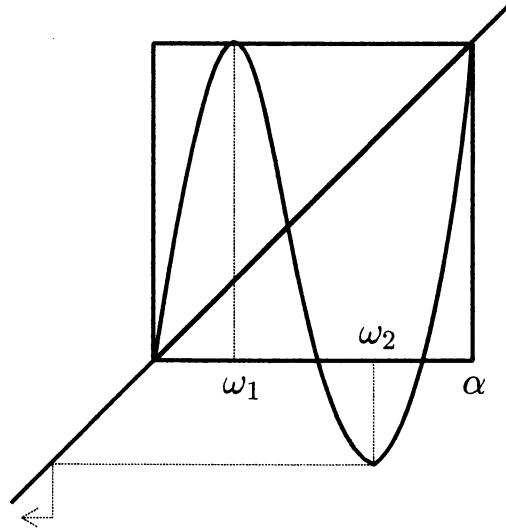


Figure A.1

(Proof of Theorem A.0.1) : §3.1.1 で 2 次多項式に対して構成したのと同様にして f に対して

$$\varphi = \varphi_f : \infty \text{ の近傍} \rightarrow \infty \text{ の近傍}$$

なる conformal map φ と Green 関数 $h : \mathbb{C} \setminus K_f \rightarrow \mathbb{R}_+$ が定義できる. これらは次を満たす:

$$\varphi_f \circ f(z) = (\varphi_f(z))^3, \quad \frac{\varphi(z)}{z} \rightarrow 1 \quad (z \rightarrow \infty),$$

$$h(z) = \log |\varphi(z)| = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{3^n} \log^+ |f^n(z)|.$$

さて, 2 次多項式の場合は external rays と equi-potential curves で partition (Yoccoz puzzle) を構成したが, ここでは equi-potential curves だけを用いて partition (Branner-Hubbard puzzle) を次のようにして構成する: まず,

$$\Gamma_0 := \{z \mid h(z) = h(f(\omega_2))\}$$

とする. 即ち, critical value $f(\omega_2)$ を含む equi-potential curve を Γ_0 と定義するのである. 次に $\Gamma_1 := f^{-1}(\Gamma_0)$ とすると Γ_1 は Figure A.2-1 にあるように ω_2 を通る 8 の字型の curve になる. 以下, 帰納的に

$$\Gamma_n := f^{-n}(\Gamma_0)$$

と定義すると, Γ_n は Jordan cruves をつなぎ合わせたものの集まりとなる (Figure A.2-1 ~3 参照). Γ_2, Γ_3 は $f(\omega_1)$ の位置によって Figure A.2-2, A.2-3 のようになる :

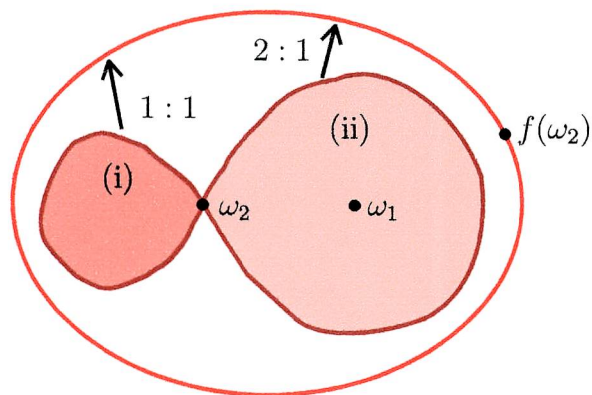


Figure A.2-1 Γ_0 と Γ_1 .

(1) Figure A.2-1 (i) に $f(\omega_1)$ がある場合

(2) Figure A.2-1 (ii) に $f(\omega_1)$ がある場合

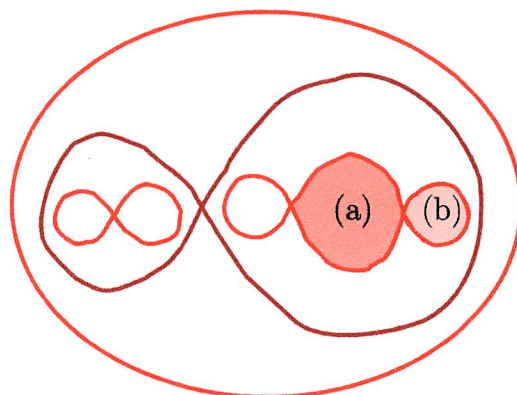
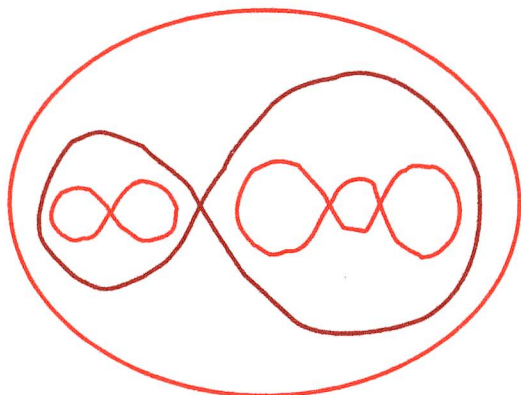


Figure A.2-2 $\Gamma_0 \sim \Gamma_2$.

(3) Figure A.2-2 (a) に $f(\omega_1)$ がある場合

(4) Figure A.2-2 (b) に $f(\omega_1)$ がある場合

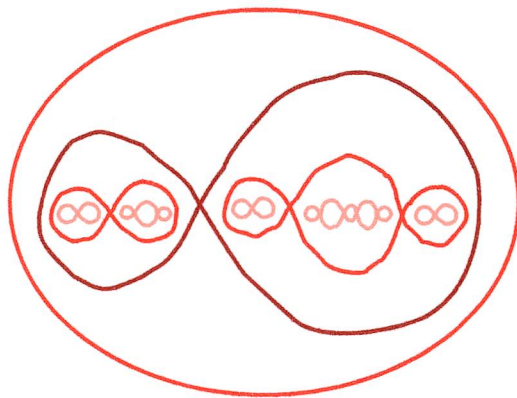
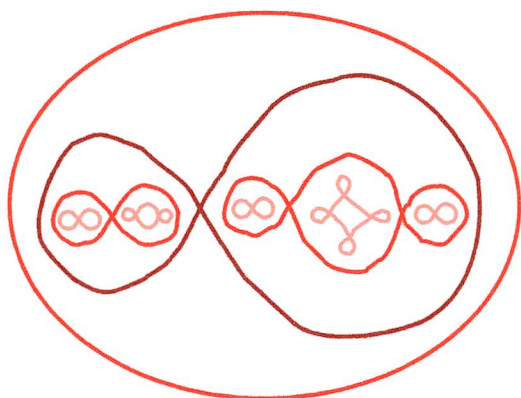


Figure A.2-3 $\Gamma_0 \sim \Gamma_3$.

次に

$$\mathcal{P}_n := \{\mathbb{C} \setminus \Gamma_n \text{ の有界連結成分} \}$$

と定義し, また $x \in K_f$ に対して

$$P_n(x) := \mathcal{P}_n \text{ の元で } x \text{ を含むもの}$$

とする. そこで

$$\begin{aligned} A_n(x) &:= P_n(x) \setminus \bigcup_{y \in P_n(x) \cap K_f} \overline{P_{n+1}(y)} \quad (n \geq 0) \\ &= \Gamma_n \text{ と } \Gamma_{n+1} \text{ で囲まれた annuli のうち } x \text{ を囲むもの} \end{aligned}$$

で x を囲む annulus を定義する (Figure A.3).

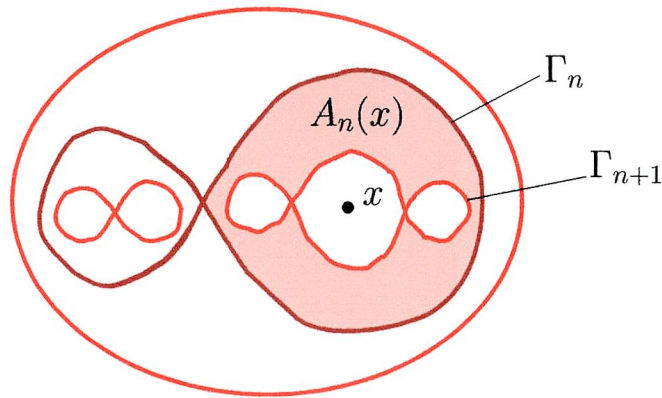


Figure A.3 $x \in K_f$ と $A_n(x)$.

ここで $A_n(x)$ が critical point ω_1 を囲むとき (即ち, $\omega_1 \in D_{A_n(x)}$ ($= A_n(x)$ の内側) となるとき) **critical** と呼ぶことにすると

$$f: A_n(x) \rightarrow A_{n-1}(f(x)) \quad (n \geq 1)$$

は annuli の間の covering map であり, $A_n(x)$ が critical なら次数 2, $A_n(x)$ が non-critical なら次数 1 (即ち, 同型) である. 一般に $A_n(x)$ を f で写していくと

$$A_n(x) \xrightarrow{f} A_{n-1}(f(x)) \xrightarrow{f} \dots \xrightarrow{f} A_{n-i}(f^i(x)) \xrightarrow{f} \dots \xrightarrow{f} A_0(f^n(x)) = A_0$$

となる. ただし A_0 は level 0 の annulus (注: これは 1 つしかない) であり, これは critical である. そして

$$\text{mod } A_n(x) = \frac{1}{2^k} \cdot \text{mod } A_0 \quad \text{ただし } k = \#\{i \mid 0 \leq i < n, A_{n-i}(f^i(x)) \text{ は critical}\}$$

が成り立つ. そこで任意の $x \in K_f$ に対して

$$\sum_{n=0}^{\infty} \text{mod } A_n(x) = \infty$$

となるかどうかを見ることになる (Figure A.4 参照).

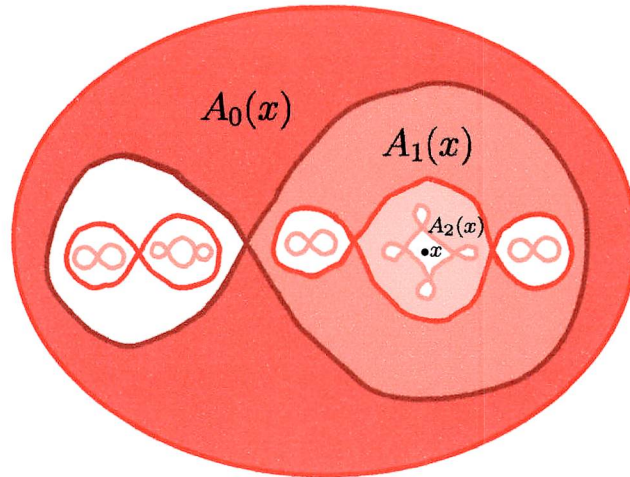


Figure A.4 $x \in K_f$ と $A_0(x)$, $A_1(x)$, $A_2(x)$, \dots .

そこで次に任意の $x \in K_f$ に対して τ -関数 $\tau_x : \mathbb{N}^* \rightarrow \mathbb{N}^*$ を 2 次多項式のとくと同様に

$$\tau_x(n) := \max\{n - k \mid 0 \leq k \leq n, f^k(A_n(x)) = A_{n-k}(f^k(x)) \text{ が critical}\}$$

で定義する. ここで任意の x に対して $f^n(A_n(x)) = A_0(f^n(x)) = A_0$ であり, A_0 は critical であるから, 上記定義式で \max は必ず存在する. 従って 2 次多項式のとくのように τ_x の値域に -1 をもってくる必要はない.

$$\underbrace{A_n(x) \xrightarrow{f} \dots \xrightarrow{f} A_{n-i}(f^i(x))}_{\text{non-critical}} \xrightarrow{f} \dots \xrightarrow{f} \underbrace{A_0}_{\text{critical}}$$

のとき $\tau_x(n) = n - i$ である. $\tau_x(n)$ は $A_n(x)$ を f で写していったとき最初に遭遇する critical annulus の level である. また $\tau : \mathbb{N} \rightarrow \mathbb{N}^*$ を

$$\tau(n) := \tau_{f(\omega_1)}(n - 1)$$

で定義し

$$\Sigma := \{n \mid \tau(n + 1) \neq \tau(n) + 1\}$$

とすると 2 次多項式のとくと同様に, この τ -関数に対して Axiom of recurrence, 即ち, $n \in \Sigma$ なら $\tau(n + 1) = 0$ または

$$\tau(n + 1) = \tau^{k+1}(n) + 1 \quad (k \geq 1, \tau^k(n) \in \Sigma)$$

と表せることが示せる (証明の方法も全く同様である. Proposition 4.2.2 (1) の証明を参照せよ).

さてここで $\#\Sigma < \infty$ のときを考えると, ある $k, n_0 \in \mathbb{N}$ が存在して $\tau(n) = n - k$ ($n \geq n_0$) であり

$$f^k : P_n(\omega_1) \rightarrow P_{n-k}(\omega_1) : 2 \text{ 対 } 1 \text{ の covering, かつ } f^{ki}(\omega_1) \in P_n(\omega_1) \ (\forall i \geq 0)$$

が成り立つ. ただし $P_n(\omega_1) := A_n(\omega_1) \cup D_{A_n(\omega_1)}$, 即ち $P_n(\omega_1)$ は $A_n(\omega_1)$ の内側を埋めて得られる単連結領域である. よって $f^k|_{P_n(\omega_1)}$ は次数 2 の polynomial-like mapping であるから, ある $c \in \mathcal{M}$ に対して $f^k|_{P_n(\omega_1)} \sim z^2 + c$ (qc -conjugate) となる. 更に

$$K(\omega_1) = K(f^k : P_n(\omega_1) \rightarrow P_{n-k}(\omega_1)) \simeq K_c$$

である. 以上で (1) は証明された.

次に $\sup_{n \in \mathbb{N}} \tau(n) < \infty$ のときを考えると, この場合も Proposition 4.2.2 (3) と同様に critical point ω_1 が non-recurrent, 即ち, ある n_0 が存在し

$$f^j(\omega_1) \notin P_{n_0}(\omega_1), \quad (j \geq 1)$$

が成り立つことがわかる.

さて, $\#\Sigma = \infty$ かつ $\sup \tau = \infty$ であるとする, この τ -関数について 2 次多項式のときと全く同様にして次が示せる:

Proposition A.0.4. $\#\Sigma = \infty, \sup \tau = \infty$ であるとする, 次が成立する:

- (1) 任意の $n \in \mathbb{N} \cup \{0\}$ に対して $\#(\tau^{-1}(n) \setminus \Sigma) \geq 1$.
- (2) 任意の $n \in \mathbb{N} \cup \{0\}$ に対して $\#\tau^{-1}(n) \geq 2$.
- (3) $k = \sup(\tau^{-1}(n) \setminus \Sigma) < \infty$ ならば $(\bigcup_{j=0}^{\infty} \tau^{-j}(k)) \cap \Sigma = \emptyset$. □

証明は Proposition 4.2.7 のそれと全く同様である.

ここで **weight function** $\mu(n) \in \mathbb{R}_+$ を次のように定義する: $\mu(0) := 1$ とし, $n \geq 1$ に対しては

$$\mu(n) = \frac{1}{2} \mu(\tau(n))$$

とする. このときも次の Combinatorial Divergence Theorem が成り立つ:

Theorem A.0.5 . $\#\Sigma = \infty$ であるとする. このとき

$$\sum_{n=0}^{\infty} \mu(n) = \infty$$

が成立する.

Remark A.0.6. 2 次多項式のときの Divergence Theorem では $\#\Sigma = \infty$ の他に $\sup \tau = \infty$ も仮定していた. 今の場合はこの仮定は必要ではない.

(Proof of Theorem A.0.5) : $\sup \tau < \infty$ のときは, ある $m \geq 0$ に対して

$$\#(\tau^{-1}(m) \setminus \Sigma) = \infty$$

となる. よって

$$\sum_{n \in \tau^{-1}(m)} \mu(n) = \frac{1}{2} \sum_{n \in \tau^{-1}(m)} \mu(m) = \infty$$

となる. $\sup \tau = \infty$ のときは Proposition A.0.4 を用いれば, 2次多項式るとき (Theorem 4.2.10) と全く同様にして証明することができる. \square

$\mu(n)$ の定義から

$$\text{mod } A_n(x) = \mu_x(n) \cdot \text{mod } A_0 \quad (\text{A.1})$$

であることがわかる. ただし $\mu_x(n) := \mu(\tau_x(n))$ である (注: Proposition 4.2.16 とその証明を参照せよ).

さて $K(\omega_1)$ が周期的でないときは $\#\Sigma = \infty$ であるから Theorem A.0.5 が成り立ち, Theorem 4.2.15 の証明と同様にして μ_x に関する Combinatorial Divergence Theorem が示せる. このことと (A.1) より任意の $x \in K_f$ に対して

$$\sum_{n=0}^{\infty} \text{mod } A_n(x) = \infty$$

であることがわかる. そこで

$$\mathcal{A} := \{A_n(x) \mid x \in K_f, n \geq 0\}$$

とおくと \mathcal{A} は \mathbb{C} のある有界領域に含まれる disjoint な annulus の集まりであり,

$$X_\infty := \left\{ x \in \mathbb{C} \mid \sum_{x \in D_A, A \in \mathcal{A}} \text{mod } A = \infty \right\} = K_f$$

が成り立つ. 従って Lemma 2.3.14 (1) (ii) より (注: 今の場合 Lemma 2.3.14 (1) (i) のようなことはおこらない), K_f は全不連結である. よって K_f は Cantor 集合となる. また Lemma 2.3.14 (2) より $|K_f| = 0$ が従う. 以上で定理の主張はすべて証明された. \square

参 考 文 献

- [Be] A. F. Beardon, *Iteration of Rational Functions*, GTM 132, Springer-Verlag, 1991.
- [BH] B. Branner and J. H. Hubbard, The iteration of cubic polynomials, Part II: Patterns and parapatterns, *Acta Math.* **169** (1992), 229–325.
- [BKNvS] H. Bruin, G. Keller, T. Nowicki and S. van Strien, Wild Cantor attractors exist, *Ann. Math.* **143** (1996), 97–130.
- [Br] H. Brolin, Invariant sets under iteration of rational functions, *Ark. Mat.* **6** (1965), 103–144.
- [CG] L. Carleson and T. Gamelin, *Complex Dynamics*, Springer-Verlag, 1993.
- [DH1] A. Douady and J. H. Hubbard, Etude dynamique des polynômes complexes I & II, *Publ. Math. d’Orsay*, (1984–85).
- [DH2] A. Douady and J. H. Hubbard, On the dynamics of polynomial-like mappings, *Ann. Sci. École Norm. Sup. (4)* **18** (1985), 287–343.
- [F] P. Fatou, Sur les équations fonctionnelles, *Bull. Soc. Math. France*, **47** (1919), 161–271; **48** (1920), 33–94 and 208–314.
- [H] J. Hubbard, Local connectivity of Julia sets and bifurcation loci: three theorems by J.-C. Yoccoz, “*Topological Methods in Modern Mathematics*”, Publish or Perish, Houston (1992), 467–511 and 375–378.
- [J] G. Julia, Mémoires sur l’itération des fonctions rationnelles, *J. Math. Pures Appl. (7)*, **4** (1918), 47–245.
- [Le] O. Lehto, *Univalent Functions and Teichmüller Spaces*, GTM 109, Springer-Verlag, 1987.
- [LV] O. Lehto and K. I. Virtanen, *Quasiconformal Mappings in the Plane*, 2nd ed. Springer-Verlag, 1973.
- [Ly1] M. Lyubich, On the Lebesgue measure of the Julia set of a quadratic polynomial, Preprint SUNY Stony Brook, 1991/10, 1–8.

- [Ly2] M. Lyubich, Milnor's attractors, persistent recurrence and renormalization, "*Topological Methods in Modern Mathematics*", Publish or Perish, Houston (1992), 513–541.
- [Ly3] M. Lyubich, Dynamics of quadratic polynomials, I–II, *Acta Math.* **178** (1997), 185–297.
- [Mc] C. T. McMullen, *Complex Dynamics and Renormalization*, Ann. Math. stud., Princeton Univ. Press, 1994.
- [Mi1] J. Milnor, Dynamics in one complex variable, Introductory lectures, Preprint SUNY Stony Brook, 1990/5.
- [Mi2] J. Milnor, Local connectivity of Julia sets: Expository Lectures, Preprint SUNY Stony Brook, 1992/11, 1–46.
- [Mi3] J. Milnor, Periodic Orbits, External Rays and the Mandelbrot Set; An Expository Account (draft of 8-95), Preprint, 1–44.
- [NvS] T. Nowicki and S. van Strien, Polynomial maps with a Julia set of positive Lebesgue measure: Fibonacci maps, Preprint SUNY Stony Brook, 1994/3, 1–88.
- [MSS] R. Mañé, P. Sad and D. Sullivan, On the dynamics of rational maps, *Ann. Sci. Ec. Norm. Sup. 4e série*, **16** (1983), 193–217.
- [Pe1] C. L. Petersen, On the Pommerenke-Levin-Yoccoz inequality, *Erg. Th. & Dynam. Sys.* **13** (1993), 785–806.
- [Pe2] C. L. Petersen, Local connectivity of some Julia sets containing a circle with an irrational rotation, *Acta Math.* **177** (1996), 163–224.
- [Po] Ch. Pommerenke, *Boundary behavior of conformal maps*, Springer-Verlag, 1992.
- [Ś] Z. Ślodkowski, Holomorphic motions and polynomial hulls, *Proc. A.M.S.* **111** (1991), 347–355.
- [Su] D. Sullivan, Conformal dynamics, in *Geometric Dynamics*, Lecture Note in Math. **1007**, Springer-Verlag, (1983), 725–752.

索引

$A_n^c(x)$	109	$\Gamma_n^{\mathcal{M}}$	106
$A_n^{\mathcal{M}}(c_0)$	109	mod A	33
$c_{\mathbb{Z}}$	106	$\mu(n)$	76
F_f^q	1	mul.....	58
$G_c(z)$	49	μ^c	113
J_c	2	$\mu_x(n)$	79
J_f	1	\mathbb{N}^*	70
$K(\omega_1)$	2, 119	ω -limit set.....	26
K^*	65, 83	$\omega(z)$	26
K_c	2	Σ	70
K_f	1	Σ^c	113
K_m	86	Σ_x	78
$p_c(z)$	1	\subseteq	2
$P_n(x)$	62	τ -関数.....	70, 78
$P_n^c(c)$	107	$\tau(n)$	70
$P_n^{\mathcal{M}}(c)$	107	$\tau^{(c)}$	113
$W_{\mathbb{Z}}^q$	106	$\tau_x(n)$	78
Y	88, 97	θ_-	106
Y_k	114	θ_+	106
Y_∞	114	$\varphi_c(z)$	49
Z	87, 94	\mathcal{A}_k	87, 95
Z_k	87, 94	$\mathcal{A}_k^{\mathcal{M}}$	114
Z_m	114	\mathcal{D}	51
α -不動点.....	56	\mathcal{M}	2
Angle(c, K_c).....	57	$\mathcal{M}_{\mathbb{Z}}^*$	106
Angle(z, K_c).....	51	\mathcal{P}_n^q	62
β -不動点.....	56	$\mathcal{P}_n^{\mathcal{M}}$	106
\widehat{C}	7	$\mathcal{R}(\theta, K_c)$	50
∂_c	107	$\mathcal{R}(\theta, \mathcal{M})$	57
density(X, x_0).....	14	$\mathcal{R}^c(\theta)$	105
density(X, Y).....	14	$\mathcal{R}^{\mathcal{M}}(\theta)$	105
dist(f, D_1).....	15	$\frac{p}{q}$ -wake.....	106
$\mathbb{D}_r(x_0)$	14	admissible.....	33
ηf	15	annulus.....	32
Γ_0	61	—の内側.....	37
Γ_n	62		